

国立国語研究所学術情報リポジトリ

ことば遊びは何を伝えるか? : ヤーコブソンの<詩的機能>とグライスの会話理論 を媒介として

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 'poetic function', context, conversational 'maxims', rhetoric, 'metalingual function' 作成者: 滝浦, 真人, TAKIURA, Masato メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/00002078 |

ことば遊びは何を伝えるか？

—ヤーコブソンの〈詩的機能〉とグライスの会話理論を媒介として—

滝浦 真人

(共立女子短期大学)

キーワード

「詩的機能」, 文脈, 会話の「格率」, レトリック, 「メタ言語的機能」

要旨

「ことば遊び」のコミュニケーション上の機能を、ヤーコブソンの〈詩的機能〉とグライスの会話理論を媒介にしながら論じる。

それ自体としての〈詩的機能〉は、語の音的／意味的連想を範列軸から連辞化して展開する自動機械的な言葉の“生成装置”であり、それによって生成されるという点では「詩的言語」も「病的言語」も同じである。ヤーコブソンは、両者の類似については論じたが、差異については論じなかつた。

「詩的言語」を「病的言語」から分かつ一線は〈文脈〉の質にある。そして、〈文脈〉の質の問題は、「ことば遊び」において最も典型的に現れる。グライスの会話理論に当てはめてみると、ことば遊びは「協調の原理」からの逸脱であり、しかもそれは「会話の含み」を生じさせる“見かけ上の逸脱”ではないことがわかる。そのかぎりにおいて、ことば遊びは「レトリック」ではないのであり、文字どおり、“伝えない”コミュニケーションであると言わなければならない。ことば遊びは、様々な仕方で語の意味的連関としての文脈を脱線させるが、今度はそのことが、言葉の流れそのものとしての文脈に対する注意を喚起し、結果的に、ある種の発見的な感覚を伴った強い印象を生じさせることに成功する。その意味で、ことば遊びの固有性は、ヤーコブソンの〈メタ言語的機能〉の体現者でもあるところに求められなければならない。

1. 落ち着きの悪い〈詩的機能〉

1.1. ヤーコブソンの六機能

ヤーコブソンの言語機能論(Jakobson, 1960 [1966])を読んだことのある人なら、全体で六つの機能に整理されたことばの働きの中に、〈詩的機能 (poetic function)〉と名づけられた独立の一項があるのを見て意外に思い、その内容を見てもう一度意外に思った記憶があるのではないだろうか。たしかに、言語芸術全般に対するヤーコブソンの関心には並々ならぬものがあり、実際、彼の『選集』の半分以上は詩学関連の論文にあてられているほどである。とはいものの、もっぱら「詩的言語」の成立のみに関わるように見える働きを、最も基本的な言語機能の一つとして取り立てるとなると、少々話は変わってこざるを得ない。

ヤーコブソンによれば、「言語的なコミュニケーションに不可欠の要因」が六つあり、六つの言語機能はその各々を焦点化する(Jakobson, 1960 [1966 : 22-25]; 邦訳 : 188-193 参照)。まず、「發

信者」（話し手）と「受信者」（聞き手），そして発信者が言及する「コンテクスト」（事態，対象）と対応し，その各々を焦点化するのが，〈表情的機能（emotive/expressive function）〉，〈働きかけ機能（conative function）〉，〈指示機能（referential function）〉の三機能である。詳細は省くけれども，これらは，コミュニケーションの人称的構成，すなわち一人称的表情，二人称的働きかけ，三人称・非人称的言及に各々対応する機能として了解することができる¹。ところで，そもそも言語的コミュニケーションが成立するためには，発信者と受信者の間に，これから情報が乗せられてゆくべきコミュニケーションの回路が作られていなければならない。従って，発信者と受信者が「接触」することそのもの，言い換えれば，コミュニケーションの回路を設定し維持することそれ自体を焦点化する対人的機能が，すべてのコミュニケーションを基礎づけるものとして働いていなくてはならないことになる。〈交話的機能（phatic function）〉と呼ばれるものがそれである²。次に，コミュニケーションの回路を確保し情報のやりとりを始めた発信者と受信者は，つねに互いの使用している言語的「コード」の同一性を確認したりそれを補正したりする必要がある。その際のコード参照機能を，ヤコブソンは〈メタ言語的機能〉と名づけた³。

これら五つの機能同様，〈詩的機能〉もまた，「メッセージ」という「コミュニケーションに不可欠な」要素を焦点化するものではある。けれども，彼の言う「メッセージ」が，いわば情報工学的意味での「発せられた言葉そのもの」のことであり，語の意味作用を指向するものではない点には，十分注意しておく必要がある⁴。〈詩的機能〉が焦点化する「メッセージ」とは，言うなればモノとしての言葉なのである。そして，ヤコブソンは，語と語の物理的・表層的な類似性に着目し，それが実際の言葉の流れの上で反復的に顕現する点をもって，詩をはじめとする「詩的言語」を特徴づける。かくして〈詩的機能〉は，「等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する」機能と定義づけられることになる（Jakobson, 1960 [1966: 27]; 邦訳: 194）。

一見して難解な定義の字面にも表れているように，〈詩的機能〉は，機械論的な色彩が濃く，反対に，主体である人間の影は非常に薄い。そしてこのことが，先に見た五つの機能とは明らかに異質の印象を与える，それゆえ〈詩的機能〉を六機能の中で最も落ち着きの悪い機能にしてしまうのである。ヤコブソン自身は，妻ポモルスカとの対話の中で，問題の命題を「ただ単に詩句の定義の一部にすぎない」実は「同語反復」の「拡大」なのだと述懐している（ヤコブソン, 1983: 136-137）。だが，「詩的言語」として成立したものをある特質によって記述し直そうとすること，そもそも「詩的言語」として括られるものを作り出す作用を言語機能の一つとして認定することとは，静的な結果と動的な過程の違いとして，やはり次元を一段異にすると言わなければならぬ。ひとたび定義されてしまった機能は，他の機能との関わりにおけるそれ自身の位置を要求し始めるからである。

1.2. 〈詩的機能〉の位置づけ

「等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する」機能とは，具体的には，語のパラディグマティック（範例的）な音的類似性及び（表層的な）意味的類似性をシンタクマティック（連辞的）な語の連鎖の上にコピーしてゆくような，一種の写像的操作のことである。この概念を用いれば，例

えば「押韻」と「リズム」のようなともに音に関わる現象を，“同一または類似の音配列（パターン）の写像による反復”といった具合に包括的に捉えることが可能になるし、また、従来別々に論じるしかなかった音的類似性と意味的類似性についても、〈詩的機能〉の写像的操作が音／意味の両面に適用され得ると考えるだけで、やはり統一的に捉えることが可能になる——例えば、日本の伝統的レトリック「掛詞」と「縁語」を、各々音的同一性を契機とする写像と意味的類似性を契機とする写像として相關的に扱うことができる。完成態としての言葉ではなく、それを作り出す過程の方に焦点合わせを行なうことによって、〈詩的機能〉は、文学上のジャンルとしての詩をはるかに超えた領域をカバーすることになった。それは、ことば遊びや標語、キャッチ・コピー等々の言葉をも、同一の機能の産物として「詩的言語」という一つの視界に収めることに成功したのである。のこと自体、一つの画期的な事件であったと言っても決して誇張ではない⁵。

しかし、それにもかかわらず、〈詩的機能〉の落ち着きの悪さは依然として解消されない。〈詩的機能〉と他の機能との関係について、ヤーコブソンは次のように述べる(Jakobson, 1960 [1966: 25]; 邦訳：192 参照)。

詩的機能の領分を詩だけに狭めようしたり、詩を詩的機能の中に閉じ込めてしまおうとするならば、そうした試みはすべて、人を欺く過度の単純化に陥ることになろう。詩的機能が言語芸術の唯一の機能であるわけではなくて、ただその優位かつ決定的な機能であるにすぎない。一方、他のあらゆる言語活動において、詩的機能は副次的、付随的な成分として機能する。

ここでヤーコブソンは〈詩的機能〉の位置づけを十分な慎重さをもって行なおうとしているように見える。だが、六つの機能が多かれ少なかれ複合的に働くものであるという注記は別の箇所でも総論的になされていることであって⁶、別段〈詩的機能〉固有の事情というわけではない。しかも、彼はそのように述べながらも、〈詩的機能〉以外の諸機能については、例えは〈表情的機能〉の「舌打ち」や〈働きかけ機能〉の「呼格」「命令法」といった、その機能が最も純粹に働いたときの例を各々挙げているのである。〈詩的機能〉についてだけその“純粹例”を挙げずに抑制的なコメントを繰り返したのは、おそらく彼の関心の中心が「詩的言語」の科学的解明の方にあって、彼自身が〈詩的機能〉と名づけた機能そのものにはなかったことが大きな理由ではあるだろう。けれども、少し角度を変えて見るならば、後に述べるような、それ自体としての〈詩的機能〉についての議論を避けざるを得なかった必然的理由も浮かび上がってくるように思われる。ともあれ、こうしたいくつかの事情によって、一つの自律的な機能としての〈詩的機能〉の射程は、ついぞ中心的な主題として論じられることができなかつたのである⁷。

2. 言葉の“生成装置”としての〈詩的機能〉

2.1. 〈詩的機能〉の純粹例

それ自体としての〈詩的機能〉は、先に見たように、主体を欠いた——敢えて言うならば、言語それ自身が主体であるかのような——自動機械的な言葉の“生成装置”として位置づけ直すことができる。そして、この生成装置の出力は、必然的に「詩学」の枠組みを超えてしまわざる

を得ない。〈詩的機能〉が生成する言葉は、音声的類似性と意味的類似性とが繰り返し現れるという特徴をもつことになるが、そうした特徴を最も純粋な形で体現するのは、実は「詩的言語」ではないのである。少し考えてみれば容易に想像されるように、もしもこの生成装置が音と意味の（両方または一方）“連想ゲーム”に導かれるままに語を吐き出してゆくとしたら、それによつて作り出される言葉は、全体としてはほとんど了解不能なジャルゴンになつてしまつたうだらう。実際、それに最も近いのは、ほぼ完全に文脈的な意味を欠いたある種の失語症患者のジャルゴン的発話であり、またヤーコブソン自身も他の論文の中で何度か言及している「グロソラリア（舌語り、異言）」であり、要するに、「病的言語」の一種と言わなくてはならないのである。

そうした純粋例的な発話を本論末尾の〔資料1〕と〔資料2〕に掲げてある。〔資料1〕は、感覚失語系の重症失語（「語新作ジャルゴン失語」）患者の発話である。症例報告をしている波多野は、

流暢性発話だが、強烈な発語圧力を伴う語漏の状態に、錯語や語新作がきわめて豊富に頻發し、各所に語音的にまたは意味的に類似する「語」群が連續的に発せられて、あたかも「言葉遊び」をしているかのような外觀を呈し、……膨大な発話量に比べて伝達情報量がなきに等しい程に極端に低い（波多野、1991：17）

と述べ、特に、音的／意味的な関連を有しつつ「語」が変化・反復して現れる現象を、各々「音韻性変復パターン」「意味性変復パターン」と呼ぶことを提倡している（同上書：61）。波多野が「言葉遊び」との類似を指摘していることからもわかるように、この「音韻性／意味性変復パターン」が、文脈的な統御を欠いた状態での〈詩的機能〉の発動から結果するものであることは、改めて説明を要しないだらう。〔資料2〕は「グロソラリア（glossolalia）」の例である。一八世紀に収集されたロシアの神秘教団フルイスト派（Khlysty）のこれらの文言においては、-ndr- や -ntr- という特定の音連鎖に対する偏好が明らかに認められる。言うまでもなく、特定の音配列の反復は、〈詩的機能〉が音的側面で發揮された場合の結果と一致する。そして、グロソラリアとは当然、通常の文脈的意味をほとんど完全に欠いた言葉である。

2.2. 〈詩的機能〉のジャクソニズム的解釈

「詩的言語」と「病的言語」の類似を考える鍵は、文脈と意味と音の秩序の階層的関係にある。言語心理学的知見が示すように、通常状態の健常者においては、意味的連想は活性化されやすいのに対して、音的連想の方はほとんど完全に抑制されている。例えば、神経心理学者ルリヤは次のように述べる（ルリヤ、1982：120）。

正常の成人の場合、語の音の類似性による結合は、ほとんどいつも制止され、意識されることはない。……われわれは、より重要な意味的結合を用いるため、これらのすべての音的連想を捨象してしまうのである。意味的結合、つまり状況的結合や概念的結合が、通常、疑いもなく優位となるのである。

また、通常の発話と理解のプロセスが、語の表層的な（すなわち連想ゲーム的な）意味連関によって構成されるものではないことを考えれば、文脈全体の平衡を保とうとする力がさらに上の

次元で働いていると見なくてはならない。従って、通常の状態では，“文脈>意味>音”という階層的秩序が安定的に機能することになる。ヤーコブソンの大機能に引きつけて言えば、通常の発話において最もよく機能するのが対象指示的な〈指示機能〉であり、そこで焦点化されるのはまさに「コンテクスト（文脈）」である。すると、語の音的／意味的連想関係が焦点化される〈詩的機能〉とこの〈指示機能〉は、通常“指示機能>詩的機能”的ように階層化され、前景的／後景的な関係の内にあると言うことができる。

以上からの帰結は次のようなものである。〈詩的機能〉によって語の音的／意味的連想が活性化されるときには、文脈全体の平衡を保つ〈指示機能〉の働きは多かれ少なかれ脆弱化している。これは、人間の神経系の機能を階層的に捉えた神経学者ジャクソンの考え方（ジャクソニズム）に通じるところがある。ジャクソンによれば、神経系の上位組織が機能崩壊を起こした場合、それに伴って下位組織の機能解放が容認されることになるのだが（Jackson, 1878-80 [1958 : 192]），それを援用して言い換えるならば、〈詩的機能〉の機能発動は、〈指示機能〉が機能弱化や機能停止によって様々な程度で脱機能化することと、つねに表裏をなす事態であると言わなければならない。従って、この二つの機能の関係という点に関する限り、「詩的言語」と「病的言語」の間にあるのはそれぞれの機能水準のバランスという量的問題であると、さしあたりは言うことができる⁸。

敢えて言うならば、本来〈詩的機能〉は、他の五つの機能と同じ平面上の六番目の機能として位置づけられるべきものではなかった。〈詩的機能〉とは、無標の機能〈指示機能〉の対極にある有標の機能であり（ウォー, 1995 : 248），言ってみれば、通常は〈指示機能〉の陰に隠れている“裏機能”なのである。先に見た「語新作ジャルゴン失語」と「グロソラリア」の場合で言えば、そこに生じた発話は、それぞれ特定脳機能の低下と特殊な宗教的心理状態のために発話主体による文脈の統御が失われ、それによって〈指示機能〉の後景化と〈詩的機能〉の前景化が生じた結果であると説明することができる。〈詩的機能〉において、言語それ自身が主体であるかのように見えるのも、まさしくそれゆえのことにはかならない⁹。

3. 〈文脈〉の質——「詩的言語」と「病的言語」

3.1. 「詩的言語」と「病的言語」の一線

〈詩的機能〉を軸として見れば、「詩的言語」と「病的言語」の近縁性は明らかである。しかし、同様に明らかなのは、総体としての「詩的言語」は依然として「病的言語」ではないという事実である。ヤーコブソンにしてみれば、それ自体の単独の働きとしては「病的言語」——意味をなさない言葉——しか生成しない〈詩的機能〉を、そのままの性格づけにおいて言語の大機能の中に位置づけるわけにはいかなかっただろう。それゆえ彼は、〈詩的機能〉そのものについて論じることを極力避けながら「詩的言語」について論じるという、ある意味では離れ技を演じてみせたのだと言うこともできる。けれども、まさしくそのために彼が、「詩的言語」と「病的言語」を分かつ一線を引くことがなかったのもまた事実である。

〈詩的機能〉が〈指示機能〉との関わりにおいてつねにその存在と働きを逆説的に浮かび上がら

せずにはいない当のもの、それは〈文脈〉である。すでに見た「病的言語」では、いずれも〈詩的機能〉の機能水準が高いのに対して〈指示機能〉の機能水準はきわめて低く、〈文脈〉と呼び得るような全体に対する一貫性はほぼ皆無であった。では、「詩的言語」における〈文脈〉はどのように位置づけられるだろうか。もし「詩的言語」における〈文脈〉成立の問題が、ヤーコブソンが好んで取り上げた韻律詩のように、〈詩的機能〉のある程度の発動と〈指示機能〉における語の象徴性の問題として置き換え可能な範囲内に収まってしまうならば、事情はかなり単純であることになる（だからヤーコブソンは〈文脈〉を論じなくて済んだのだとも言える）。しかし実際には、次に見るように、「詩的言語」における〈文脈〉は、単に〈指示機能〉の機能水準という量的問題には還元できない別の質をもっていると言うべきであるように思われる。そこで、ともに〈詩的機能〉の機能水準がきわめて高い「詩的言語」でありながら、〈文脈〉のありようが大きく異なる二つの例を見てみることにする。

3.2. 「大文脈」と「小文脈」

まず、〔資料4〕として掲げたのは、井上陽水の作詞による「アジアの純真」である。全体に散りばめられた地名と事物名が、自由連想的なイメージの連鎖として緩やかな意味的連関を一応は作っているものの、全く無関係な語も紛れ込んだ実際のその連関はといえば、綻びながら辛うじてつながっている程度のものでしかないとも言えるだろう。ところが同時に、語群の全体が /-in ~-an~-un/ /-ia/ /-ka/ /-aote/ 等の強い音的連関の内にあるために、拡散しかけたイメージの無秩序性は繕い合わされ、あたかも初めから全体が「アジア」というテーマに包括されていたかのような印象を生じさせるのである。文レベルでさえ各所で意味をなさないこの詞において〈文脈〉は当然脆弱であり、〈指示機能〉の機能水準からすればほとんど「病的言語」並みである。しかし、それにもかかわらずこの詞が「詩的言語」であり続けることができているとすれば、それは“枠”ないし“テーマ”としての「大文脈¹⁰」が保持されている——少なくとも、そう見せかけている——ことによって、部分における「小文脈¹⁰」の衰退が、詞全体の〈文脈〉の決定的瓦解を引き起こす一步手前で留まっているからにほかならない。

一方、〔資料5〕は、谷川俊太郎『ことばあそびうた』所収の「ばか」と題された一篇である。この詩においても音的連関がとにかく圧倒的であり、「ばか」というテーマから発する「ばか～はか～はが」あるいは「かった～ーかった～かんだ」といった類似する音連続の反復と、それらを含む「か(が)」音と「た(だ)」音の頻繁な使用は、あまりに顕著である。「言語とは……ぼくの内部の他者」であると言う谷川が、半ば「自働記述」的な手法によって書いた作品の一つであればなおのこと(谷川, 1983: 208-210), この詩は〈詩的機能〉のほとんど純粹な発現によって産み出された——少なくとも、そう考えたくなるほど“純粹例”的な——ものと見えてくる。だが、一読して明らかのように、この詩には病的な色彩は露ほどもなく、全体が完全に一貫した一つの物語を作り上げていることもまた確かである。これは作品集『ことばあそびうた』全体に当てはまる特徴でもあるのだが、まず、一つ一つの「小文脈」が“語呂合わせ”によって作られ、しかしそれ自体としても破綻を来たさずに成立する。そうした「小文脈」を連ねただけでは「大文脈」

は到底成立し得ないとも思われるのに、しかし「大文脈」はまんまと“帳尻合わせ”をしおおせて成立してしまう。つまり、そこでの「大文脈」は、予め用意されていた〈文脈〉というよりも、いわば事後的に、すなわち言語を“自走”させた結果において、なおかつ統御され成立させられたものとしての〈文脈〉なのである。

要約して言えば、井上の詞は「大文脈」に依拠して成立しており、一方、谷川の詞では、第一義的には「小文脈」が顕著である。これら二つの例に見られるように、「詩的言語」における〈文脈〉の問題は、「大文脈」と「小文脈」の組み合わせとして捉えたときに最もよく理解できるようと思われるし、「大文脈」と「小文脈」の関係のありようも——それを〈文脈〉の質と呼ぶことにしよう——、「詩的言語」の種類に応じて多様に可能である。

「詩的言語」の中で、こうした〈文脈〉の質の問題が最も決定的に重要である領域は、その様態の多様性において〈文脈〉の質の多様性を体現している「ことば遊び」の領域であるように思われる。そこでの〈文脈〉を検討してゆくことは、〈詩的機能〉とコミュニケーションが切り結ぶ関係の一断面を見せてくれるはずである。

4. ことば遊びと〈文脈¹¹

4.0. ことば遊びの型

およそ「遊び」というものが次第に様式化されていくつかの型に収まってゆくように、ことば遊びにおいてもいくつかの代表的な型と呼ぶべきものが存在する。筆者なりに分類すれば、ことば遊びの型は、瞬間に口について出る言葉が会話の中に挿まれてゆくような即興型（洒落一般、例えば「駄洒落」「むだ口」「地口」）と、しばしば文字を媒介とした緻密な計算によって成り立つような技巧型（例えば「アクロスティック（折句）」「アナグラム（綴り換え）」「回文」），それに、“遊びのための遊び”として複数の人の間でやりとりされるゲーム型（例えば「なぞかけ」「しりとり」）とに大きく分かれ、〈文脈〉の様態も当然それらの違いに応じて異なってくることになる。

4.1. 即興型——むだ口、駄洒落、地口

まず、即興型のことば遊びでは、必ず音的連想が契機となっており、音の同一性／類似性を介して語の“乗り換え”が局所的に生じることになる。〈文脈〉の観点からこれを見れば、新たに加わった余剰な情報は必然的に小文脈の複線化を引き起こし、多くの場合、それは“脱線”を意味する。

脱線した小文脈が大文脈とどのような関係を結ぶかは、ことば遊びの種類と洗練度に応じて様々に異なる。〈文脈〉をただ搔き回して終わるものとの典型は、「むだ口」と呼ばれることば遊びである。〔資料6〕(1)に掲げた古典的なむだ口「驚き桃の木山椒の木」「恐れ入谷の鬼子母神」「呆れ蛙の頬冠り」にも明らかのように、掛詞を起点に意味を度外視して冗長化された小文脈は、宙吊りになったまま再び大文脈と触れることなく終ってしまう。むだ口がしばしば、相手の話の腰を折ったり半ば捨て台詞的に用いられたりするのも、このことと無関係ではないだろう¹²。むだ口をたたかれた側の当事者にとって、逸脱したまま戻ってこない〈文脈〉を修正する発話努力は過剰

な負荷となるからである。現代ではこの手のむだ口は盛んではないが、時折流行語的に現れることがある。最近で言えば、「重たくて腕が折れてシマウマ」のように、「～してしまう」の「しまう」をすべて機械的に「シマウマ」に置き換えてしまう例があった。この場合もやはり、置き換えが忠実に実行されると会話はたちまち邪魔臭い「シマウマ」たちに占拠され、当事者たちは会話の本線に対する集中力を削がれてしまうことになる。

いわゆる「駄洒落」や成句のもじりとしての「地口（口合い）」では、〈文脈〉の質がそのままことば遊びとしての出来の良し悪しを左右することになる。「おやじギャグ」と蔑称で呼ばれる不出来な駄洒落はその典型で、中には小文脈を脱線させ大文脈を搅乱すること自体が目的としか思えないようなものもある。会話のもう一方の当事者が、それによって本来意図されていた情報伝達が単に阻害されたと感じれば、おそらくそこに笑いが生じることはないだろう。

しかし同時に、駄洒落における〈文脈〉がつねに途絶とりセットを繰り返すばかりでは決してないという事実も強調しておかなくてはならない。〔資料6〕(2)に挙げた会話の例では、テレビを買う客が「テレビの台」をおまけとして要求するのに対して、店員は、そんなことをしたら「台無し」と応酬する。「台」に引っかけた「台無し」は小文脈を複線化する。それによって聞き手は、“話が根底からひっくり返る”という大文脈と、あまりに逐語的な新たな小文脈“目の前の台が無くなってしまう”こととの間で、そのどちらに乗るべきかを選ばされ、しかしどちらに乗っても同じであることに気づかされたときに、“笑う”のである。このことは、新たに生起した小文脈がどこかの地点で再び大文脈と交錯し得たならば、そのことがむしろ大文脈を強化する効果をもたらすということを示している。

一種の本歌取りと言える「地口」の場合、その出来は当然“本歌”との関係がどのように作られ得たかによって決まることがある。小谷野が言うように、地口とは本来「正典（キャノン）」からの「価値低下」が笑いを生むようなパロディーだからである（小谷野、2000：41）。〈文脈〉の観点からこれを言い直せば、ずらされ脱線した小文脈が、“本来の”ではない仕方によって再び大文脈と噛み合うことができているかが分かれ目になる、と言うことができるだろう。〔資料6〕(3)に挙げた例、「方々にも筆の誤り（く弘法にも筆の誤り）」や「ぜいたくは素敵だ（くぜいたくは敵だ）」に見られるように、ずらされた小文脈が、“本歌”における大文脈を裏切りつつも、しかし再び整合的にそこに回収されてゆく場合に、その表現は他の同義的表現よりもはるかに印象の強い言葉になる。他の例はどれも「B級機関」と呼ばれるコンピューターが作った地口だが¹³，“本歌”との関係が最も穏当なのが「腐ってもタイソン」、あまりに定番になりすぎたものへの揶揄も込めて言うのなら「当たり前だの倉本聰」、浮かぶイメージの意外性が生む笑いという点では「石橋をたたいて渡哲也」、といった具合に、それぞれがそれなりのパロディーとして成立している。少なくとも一般論として、“本歌”との文脈上の類似や対照の存在が、もじりとしての異化効果が生じる条件であると言ふことはできるだろう。

4.2. 技巧型——アクロスティック（折句）、アナグラム（綴り換え）、回文

「アクロスティック（折句）」「アナグラム（綴り換え）」「回文」など、技巧型のことば遊びと共に

通する特徴は、（技巧的である以上当然とも言えるが、）非常に強い音的制約を受けながら、最終的には文脈上の“帳尻合わせ”が行なわれなければならないところにある。中でも、コミュニケーション上の機能の点で最も興味深いのは、各句の頭音（および尾音）をつないでゆくと新たなメッセージがあぶり出されてくる仕掛けの「アクロスティック（acrostic）」である。

おそらく日本で最も有名なアクロスティックは、在原業平の作と伝えられる歌、

から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしづ思ふ（伊勢物語）

における、各句の頭文字の綴り合わせによる題「かきつばた」のよみ込みだろう。現代のものとしては、例えば〔資料7〕(1)に掲げた谷川俊太郎による一篇がある。そこでは、「あくびができるわいやけがさすわしにたいくらいてんでたいくつまぬけなあなたすべてころべ」を七音ずつに区切った句の頭文字に「あいしてます（愛してます）」というメッセージが仕込まれている。

まず確認しておきたいのは、アクロスティックにおいては、各单位の頭文字（末尾文字）からあぶり出されてくる語（句・文）の意味は、そこに書かれた言葉全体の大文脈に沿っている必要はないということである。だからこそ、「かきつばた」の歌では、川端に咲く杜若〔かきつばた〕と妻を恋う心情という、関連性が強いとは言えない二つの事柄が、アクロスティックによって結び付くことで表現全体に奥行きを加え得たのだし、谷川の作品でも、罵倒のごとき字義的意味と隠された本当のメッセージとが真っ向から対立するものであればこそ、わざわざ暗号的な手法を用いる甲斐があるのである。資料に添えた「あいしてます」のもう一つの（平凡な）アクロスティックと比べてみれば——この場合のアクロスティックの効果は、せいぜいが大文脈をそのままなどることによる強調である——、ことば遊びとしての面白さは圧倒的に前者に分のあることがわかるだろう。

実際のコミュニケーションにおいてアクロスティックが用いられるときには、アクロスティックにおける〈文脈〉の二重性とも言うべき性格がより鮮明に表れる。資料に掲げた吉田兼好と友人の頓阿法師とのやりとりは、さしあたりどうということのないメッセージを装いながら、実際には頭音と尾音に甚だ現実的な二重のアクロスティック（「沓冠」）を仕込んだ手紙の交換になっている。「米」と「錢」を無心する手紙はそのままでは書きにくいが、かといって、切羽詰った状況では書かないわけにもいかないし、受け取った側も、相手の面子を考えれば、あまり直截な表現はとりたくない。互いにとって、正面切っては言いにくいことを言うという目的のためには、アクロスティックは絶好の手段であり、そこにおいて〈文脈〉の二重性がきわめて現実的な用をなすのである。

アクロスティックが用いられるときには、多かれ少なかれ、本文の文脈はいわば“見かけの大文脈”であり、アクロスティックによって生じる別のメッセージは“隠された真の文脈”である。そうしたアクロスティックにおいては、〈文脈〉は定義上構造的に二重化されており、従って、読み手に与えられた大文脈をそのまま〈文脈〉と呼ぶわけにはいかないことになる。そして、コミュニケーション・ツールとしてのアクロスティックの機能はまさにそこにある。

但し、ここで付け加えておくならば、こうした技巧型のことば遊びは、“これはことば遊びである”という何らかのメタ・メッセージ（後述；5.2参照）がなければ、聞き手にはそれと気づかれ

ずに終わってしまう可能性がかなり大きいということである。その意味では、これらのことば遊びに“参加できている”という感覚を共有することそれ自体が、ヤーコブソンの言う〈交話的機能〉の発現であると見ることもできよう¹⁴。

「アナグラム (anagram)」や「回文 (palindrome)」になると、音的制約がさらに強くなる分だけ、コミュニケーションの実際的手段として用いられることは少なくなるが、一方、詩歌における特殊技法として用いられた場合には、出来上がった言葉は音配列上の類似性／同一性を強く現しつつ、なおかつ文脈的整合性を維持するという際どいバランスを実現することになる。〔資料7〕(2)には、アナグラムの手法を用いた俳句の例を挙げてある¹⁵。どの例にも音的制約が強すぎるがゆえのある種の“苦し紛れ”が感じられ、その点では、最も“正統的”に見える句「里祭／妻去り独り／悟り待つ」も例外ではない。むしろ、“苦し紛れ”が結果における“帳尻合わせ”の意外性と首尾よく結びついたときに、かえって通常の俳句では出せない面白みが生じるのだと考えた方がよいだろう。「親鸞忌／あら、きん死んだ／ぎん知らん」はその好例と見ることができるし、さらに、「蕪汁／ジブラルタルか／ブラジルか」では、帳尻合わせすらもはや名目化し、実は合ってもいらない帳尻を合わせたふりをするナンセンス自体が笑いを誘うことになる。最後の例はともかくとして、一応の整合性をもった〈文脈〉について言えば、それらは予め意図されていたものでは全くなく、音や意味の制約にもかかわらず成り立ち得た、多くの場合、後からついてきた大文脈と言う方が正確である。こうした事情は回文にも全く同様に当てはまり、資料に掲げた『しけり柳』の回文、「留守守る日若夫婦かは昼もする」における〈文脈〉が、ほとんどacrobatiqueな技によって辛うじて保たれたバランスであることは明らかである。

この事後的に成立する〈文脈〉という性質が現実のコミュニケーションに顔を出す場面領域が一つあるように思われる。それは、ディスコミュニケーション、とりわけ勘違いという場面である。〔資料7〕(2)の最後に、そうした例を一つ挙げてある。そこでは、「あしかのなかまのけもの」である「オットセイ」が、アナグラム的勘違いによって易々と「アシカの怠け者」に転じてしまう¹⁶。こうしたケースを“企まさるアナグラム”と呼ぶとすれば、そこでは新たに生じた小文脈がとりあえず大文脈に収まってしまうがゆえに、それは「勘違い」というコミュニケーション上の一つの機能を、意図せずして果たすことになってしまうのである。上との対比で言えば、図らずも帳尻の合ってしまった〈文脈〉と呼ぶことができようか。

4.3. ゲーム型——なぞかけ、しりとり

第三の型は、文字どおり“遊びのための遊び”としてやりとりされる、「なぞかけ」や「しりとり」に代表されることば遊びである。「詩的言語」の一種としてのことば遊びをとりわけ〈詩的機能〉との関わりにおいて捉えることが本稿のアプローチであるから、この型のことば遊びは直接の論点としては触れてこない。とはいえ、広い意味での〈文脈〉と関わる次の点については、ここで指摘しておく意味があるようと思われる。

「…とかけて…と解く。その心は～」の形で馴染み深い「三段なぞ」は、二つの事項を共通の特徴で結びつけるゲームである。これは、二つの主語の間に隠れた共通の述語を見つけ出す遊びで

あり、さらに言えば、二つの文（小文脈）が述語の共通性によって同一視できるという〈文脈〉（大文脈）を作ること自体の遊びであると言うことができる。この場合、二つの事項は元々結びつきにくいかまたは結びつくはずのないものが選ばれるから、結果において成立する〈文脈〉はあくまで事後的に成立したものであると言わなければならない。事後的に成立した〈文脈〉が意外性に富んでいるときほど大きな笑いを生むことでもわかるように、ここでの〈文脈〉はまさしく“発見”されるものである。反対に、発見のないなぞかけは退屈で、たちまちルーティンに堕してしまうことを免れない。

5. “伝えない” コミュニケーション

5.1. ことば遊びはレトリックか

小文脈の脱線、見かけの大文脈、あるいは事後的にのみ成立する大文脈、等々——〈文脈〉という観点から見たときに浮かび上がってくることば遊びのこうした性格は、コミュニケーション論的にどのような機能をもつものとして位置づけられるだろうか。試みに、語用論や会話分析における古典的原理と目されるグライスの「協調の原理（Cooperative Principle）」に照らし合わせてみよう（Grice, 1975 : 45-46; 邦訳 : 37-39）。「会話者が（特別な事情がないかぎり）遵守するものと期待される大まかな一般原理」とされる「協調の原理」の下には、次のような、より具体的な四つの「格率（maxims）」が置かれている（要約して示す）。

「量（quantity）の格率」

必要な量の情報だけを伝え、必要以上のこととは言うな。

「質（quality）の格率」

真実のみを伝え、誤ったことや根拠のないことは言うな。

「関係（relation）の格率」

関連性のあることを言え。

「様態（manner）の格率」

明瞭に伝え、曖昧さを避け、簡潔に順序立てて話せ。

これらの格率に当てはめてみると、上で見てきたことば遊びはどれも、何らかの点でどれかの格率に違反していることがわかる。例えば、即興型の「むだ口」は、無駄に情報量を増やす点で「量の格率」に反し、新たに加わった情報が本筋とは関係のない情報である点で「関係の格率」に違反する。技巧型の「アクロスティック」は、とりわけ“見かけの大文脈”と“隠された真の文脈”が食い違うタイプのものなら、二つの文脈が相互に関連性がない点で「関係の格率」に違反することに加えて、二つの文脈の内容が互いに相容れないほどに対立している場合には「質の格率」にも反する。こうして、言葉のやり取りを基本的に「協調的な企て」と見るグライス流の考え方を単純に適用すると、ことば遊びは単なる“マナー違反”か、少なくとも非協調的な〈文脈〉の搅乱行為であることになってしまう。

但し、ここでは次の二つの点に注意が必要である。第一に、グライスは「協調の原理」と四つの「格率」を、実際にすべての会話の参加者を拘束する原理原則として位置づけているわけでは

ない。それは「それに従うことが理にかなっており、放棄されるべきでないようなもの」として構想されたものであり(同上書：48; 邦訳：41), 端的に言えば、「もし情報を効果的に相手に伝達したいならば」という仮定が前提される場合にのみ、話し手に遵守が期待されるような性質のものである¹⁷。第二に、グライスは、「協調の原理」と四つの「格率」の妥当性を主張する一方で、格率からの逸脱が生じているように見える発話のコミュニケーション上の機能をも論じている(同上書：49ff.; 邦訳：44ff.)。会話の中で格率から逸脱するような発話がなされた場合、往々にしてそれは“見かけ上の格率違反”であり、話し手はむしろそれを「活用」して「会話の含み(*conversational implicature*)」を生じさせようとしているのである¹⁸。そして、その具体例として、グライスは、皮肉、隠喩、緩叙法、誇張法といったレトリックにおいて、格率がどのように活用されているかを述べる。

この二つの点とことば遊びはどのような関わりをもつだろうか。まず第一の論点について言えば、ことば遊びによって小文脈を脱線させ、真の文脈を覆い隠し、あるいは故意に辻褄を合わせにくくすることは、たしかに情報伝達の効率性を旨とする合理的な言葉のやり取りとは言えず、その意味では、ことば遊びはやはり「格率」からの違反行為であると見なければならないことになる。では、この格率違反は、グライスの論じたような「含み」を生み出す“見かけ上の格率違反”なのだろうか。グライスの挙げている皮肉や隠喩の例で言えば、発話が格率から逸脱しているように思われても、話し手が「協調の原理」を遵守していないと考えるべき特段の理由もないことから、聞き手は、「発話の意味」とは異なる含みをもつ「発話者の意味」が別にあると解釈することになる。しかし、ことば遊びにおいて、そうした「含み」としての「発話者の意味」が見出せるケースはない。

例えば、「アクロスティック」において、言葉の受け手が“見かけの大文脈”的な内容を奇妙だと感じ、それとは別の“真のメッセージ”がアクロスティックによって仕込まれていることに気づく、という局面だけを考えるとすれば、そこではたしかに「協調の原理」が機能していると言うことができる。しかし、その場合“真のメッセージ”は、意味上の「含み」として生じるのではなく、隠されてはいるにせよとにかく現実にそこにあるという点が重要である。あるいはまた、皮肉、例えば「大切な本を汚してくれて、ありがとう」との比較をしてみるのもわかりやすいかもしれない。確かにそこでは、述べられている大きな迷惑と「ありがとう」との結びつきが小文脈を“脱線”させる。しかし、その脱線は、「ありがとう」という語の意味を反転させるという小文脈内部での調整によって、大文脈との整合性を“復旧”することができ、それゆえ“見かけ上の格率違反”だと解釈することが可能となるわけである。ところが、ことば遊びにおいては、そうした内部調整による“復旧”は不可能である。

ここからわれわれは、ことば遊びは、少なくとも皮肉や隠喩のような狭義の「レトリック」とは重大な点で性質を異にするコミュニケーションである、という結論を導かなければならない。ことば遊びにおける格率違反は、何はともあれ言葉の流れそのものを攪乱することによって行なわれる違反である。それによって大文脈は背景に退くか、少なくとも一旦は宙吊りにされ、その分だけ情報の伝達性は（意味的にというよりもむしろ、端的に物理的に）阻害されることになる。

つまり、その限りにおいて、ことば遊びは、多かれ少なかれ“本当に伝えない”のであって、その点ではまさしく、「合理的」ではないコミュニケーションの一形態であると言わなければならぬのである。

5.2. メタ言語としてのことば遊び

かつてペイトソンは、「遊び」の特徴として、「これは遊びだ」という「フレーミング (framing)」が可能である点を指摘した(Bateson, 1972 [2000: 179, 184ff.]; 邦訳: 261, 266ff.)。これを一種の基準として援用するならば、ことば遊びが「遊び」である限りにおいて、そこでも同様に「これは遊びだ」というフレーミングが可能でなければならない。そのようなフレームの一つの例として、「『なあんちやって』のフレーム」と呼び得るフレームがある¹⁹。即興型のことば遊びにしても技巧型のことば遊びにしても、基本的にことば遊びには、「なあんちやって」のフレームを付加することができる。例えば、「方々にも筆の誤り……、なあんちやって」、あるいは「蕪汗、ジブ・ラルタルか・ブラジルか……、なあんちやって」という具合にである²⁰。

ここでフレーミングの問題を取り上げるのは、この「なあんちやって」のフレームを、他のフレーミング——例えば、嘘について「今のは嘘だよ」と言う場合や、冗談について「いや、冗談、冗談」と言う場合のような逐語的なフレーミング——と比べてみると、そこからことば遊びに特有の性格が浮き彫りになってくるように思われるからである。嘘や冗談の場合には、そうした一定のフレームを付加することで発言自体を取り消すことが可能である。一方、「なあんちやって」は、それらとは異なり、自分の発言そのものを取り消すことはなく、だからことば遊びに対して、「今のはことば遊びだよ」とか「いや、ことば遊び、ことば遊び」といったフレーミングが基本的に成り立たないのだと言うこともできる。「なあんちやって」は、発せられた言葉が必然的に負わざるを得ない字義的な意味内容を（一旦）無化してみせははするが、しかし発言自体を取り消すわけではないのである。ここから、ことば遊びの性格が三点抽出できるだろう。

(i) 発言は取り消すことができず、発せられた言葉はそのまま残る。

例えば、出来損ないの駄洒落を言った人が、「いや、何でもない。忘れて！」と言うことはできるが、それは発言を取り消しているのではない。むしろ、取り消せないからこそ、聞かなかつたことにしてほしいと頼むしかないと見なくてはならない。

(ii) しかし話し手は、発した言葉の字義どおりの意味を伝達しようとしたのではない。

(iii) かといって、ことば遊びにおいては、言ったことの外に「含み」があるわけでもない。

先に見たように、ことば遊びによって生じた小文脈を大文脈との間で意的的に調整することはできない。

つまり、ことば遊びとは、あくまで発せられた言葉そのものによって、少なくとも第一義的には指示的な伝達ではない何かを行なう行為なのだと言わなければならない。

その何かが何であるかを解く鍵は、実は再びヤーコブソンの〈詩的機能〉の内にあるように思われる。彼が〈詩的機能〉の特徴づけとして述べた「メッセージ [=発せられる言葉] そのものへの焦点合わせ」は、実は「詩的言語」全般ではなく、「ことば遊び」にこそふさわしい評言であ

る。もちろん、ヤーコブソンが意図した言葉の写像的生成というアイディアは前者のために取つておかねばならないが、この特徴づけを字義どおりに読むならば、それは、「メッセージ」自身とは論理階型 (logical type) を異にする“メタ・レベルの言及”として実現されるもののはずである。発せられる言葉そのものを焦点化するということは、それ自体がすでにメタ的な行為なのであり、そして、ことば遊びの第一の機能もそうしたメタ言語的言及にあると言うべきなのである——そこには例えば、“この単語とこの単語の形は同じである／似ているという事実に注意せよ”といったメタ・メッセージがある。従って、ヤーコブソンの六機能に当てはめて言えば、ことば遊びは実は「メタ言語的機能」の好例でもあることになる。

ことば遊びが基本的に、語の意味“内容”ではなく語の表面的な連想関係という“形”を契機として作られるものであることを思い出そう。言葉の内容ではなく形に焦点を当てるることは、当然、言葉の流れとしての〈文脈〉を止めることになるが（“伝えない”ことば），しかしそのことは、通常ならそのまま流れ去ってしまう〈文脈〉を浮き立たせ、聞き手にその存在を意識化させることになる。あるいは、普通なら見ないで通りすぎてしまうものにマーキングをするような効果と言ってもよい。それによって聞き手の側も、伝達されるべき情報内容への注意を少なくとも一時的には逸らされてしまうことになるから、もしそのまま〈文脈〉が途絶してしまえばその言葉は「おやじギャグ」として嫌われることにもなるし、もしそこで「なあんちやって」によるフレーミングが付加されるなら、その“メタ・メタ・メッセージ”によって〈文脈〉の綻びは別の糸によって繕われることになる。（先の“隠された”アクロスティックのような場合なら、相手に気づかれなければ、そのコミュニケーションは“流産する”ことになる。）

しかし、ここで、前節に見た成功したことば遊びの多くが〈文脈〉の“帳尻合わせ”をしおおせていたという点に、改めて注意を向けておかなくてはならない。逸脱した小文脈が再び大文脈と交錯すること、あるいはまた、種々の搅乱要因を包み込むようにして大文脈の帳尻が合つてしまふこと、こうした事後的に気づかれる文脈上の整合性は、“伝えない”要因となるはずだったものがかえって〈文脈〉を顕在化させ、さらにその〈文脈〉が意味的に収まってしまうことによって、通常以上に“伝えてしまう”言葉を生み出すのである。そのとき、意味内容とともに伝わるのがある種の“発見”的感覚であることは言うまでもない。

そのようにして“伝えつつ伝えない”ことと“伝えないことにおいて伝える”こととの間を往復する運動、それがことば遊びなのである。

付 記

本稿は、2000年12月8, 9日に「ことばとコミュニケーション」のテーマで開催された「人工知能学会第12回 AI シンポジウム（第6回ことば工学研究会）」（於・大阪国際会議場）において、「ことば遊びとコミュニケーション—ヤーコブソンの〈詩的機能〉を触媒として—」のタイトルで行なった招待講演の内容を基に論文化したものである。（講演要旨：『“A I シンポジウム 2000” ことばとコミュニケーション』人工知能学会研究会資料 [SIG-J-A 002] pp.63-65.）講演の機会を与えてくださった NTT コミュニケーション科学基礎研究所の阿部明典氏、NTT サービスインテグレーション

ン基盤研究所の松澤和光氏、及び、当日の質疑応答の中で有益なコメントを頂いたすべての方々に感謝する。本稿の草稿を読んで有益なコメントを下さった東京外国語大学の中川裕氏にも感謝したい。

また、『日本語科学』誌の査読委員からは、問題点の詳細かつ的確な御指摘を頂いた。そのすべてに答えられたかどうかは心許ないが、心からの感謝を申し上げたい。言うまでもなく、論文中の誤りや不備は、すべて筆者の責に帰するものである。

注

- 1 この点から生じるこれら三機能の含意については、滝浦(1992b)を参照されたい。
- 2 この機能がもつ射程については、滝浦(1992a)および滝浦(2000b)第四章後半を参照されたい。
- 3 この機能は、ヤーコブソンが考えたようなそのポジティブな方向性においてよりも、むしろネガティブな方向性、すなわちその機能不全において、より多くの現象に関わっているように思われる。例えば、同一の語の方言的差異に起因するディスコミュニケーションや、“流産した”比喩のケースなどがそれにあたる。
- 4 語のシニフィアン（意味するもの）とシニフィエ（意味されるもの）を媒介する「意味作用（signification）」のありように目を向けるならば、そこから例えれば、擬音・擬態語（音喻）や字喻、あるいはもう少し広く隠喻の成立といった、言語におけるイコン性の問題全般を論じることもできるだろう。
- 5 写像的原理が導入されたことのヤーコブソン詩学内部における意義については、山中(1989: 183-184)をも参照されたい。
- 6 例えば、「それらの〔六機能〕うちのただ一つの機能しか現れていないような言語的メッセージは、まず見出せないであろう。」(Jakobson, 1960 [1966: 22]; 邦訳: 188 参照)
- 7 ヤーコブソンが最晩年にリンダ・ウォーと共に著で上梓した『言語音形論 (The Sound Shape of Language)』では、神がかり的な言葉「グロソラリア」を論じた直後に〈詩的機能〉に触れている箇所がある(第四章「言語音の魔力」)。しかし、そこでも彼は、両者の間の関連性について曖昧な指摘をするにとどまっている。
- 8 言語の病的状態の発生メカニズムについて、先のルリヤは次のように説明している(ルリヤ, 1982: 120-121)。「この〔文脈的・意味的〕選択的結合が消失し、語の音による連想が、意味による結合と同じ確率で浮かびはじめる、そのような特殊な意識状態がある。」「大脳が制止的状態、もしくは『位相』状態の場合、『強さの法則』が破壊され、……すべての刺激（強い重要な刺激と、弱い重要でない刺激）が、同じ強さの反応をひきおこしあげる。そして、さらに強い制止状態になると、『逆説』相、あるいは、『超逆説』相が生じ、そこでは、弱い、重要でない刺激が強い刺激よりもより強い反応をひきおこすか、あるいは、強い刺激が極度の制止をひきおこす。」詩的言語においては、こうした結果が意図的に引き起こされていると言うことができる。
- 9 精神分裂病患者に時折観察されるジャルゴン様の発話でも、発話主体はやはり文脈を統御できなくなっているように見える。有馬(1986: 150)はそれを、「連合の軸の私的連想の氾濫が連辞化され、連辞の軸の社会習慣的な統合関係も衰退し」たために生じた発話と説明し(但し、有馬はヤーコブソンには言及していない)、笠松章の挙げる発話例を引用、分析している。その発話例を〔資料3〕に再録しておく。
- 10 以下の考察では、〈文脈〉を適宜「大文脈」と「小文脈」とに分けて論じる。「大文脈」は概ね言葉の全体における“意味的まとまり”を、「小文脈」は概ね部分における“言語的つながり”を、

各々指すものとする。それぞれ、談話分析においてよく用いられる「整合性 (coherence)」と「結束性 (cohesion)」の概念に倣つたものだが(亀山, 1999: 97 参照), 次節で論じる「ことば遊び」には、個々の「発話」を単位とする談話分析の基本的手法がそのままでは適用できないため、敢えて規定の緩い概念として「大文脈」「小文脈」という呼び方を探ることにする。

11 以下の考察は、滝浦(2000a)で素描した論点をそれぞれ精緻化し、不備を正して改稿したものである。

12 クラッカーの宣伝のキャッチ・コピーとして有名な「あたり前田のクラッカー」(昭和38年、前田製菓)は、一見する限りこの点に関する例外であるように見える。しかし、このコピーが、「前田」という社名とその製品である「クラッcker」を織り込みつつ、なおかつそれが「当たり前」と言えるほどの定番であるというメッセージを結果的に成立させている以上、脱線した「小文脈」は実は“むだ”ではないのであり、従って、「むだ口」は装われたものにすぎないと言わなくてはならない。但し、クラッckerとは無関係な話題の中でこの言葉を会話に挟んだとすれば、もちろんそれは歴とした「むだ口」となる。

13 「B級機関」は、「人工知能学会」の研究会「ことば工学研究会」の研究者たちが作り上げた「永遠にだじやれを出力する機械」である。詳しくは、松澤他(2000), 歌田(2000)を参照。

14 もちろん、こうした〈交話的機能〉の発現としての“参加”感覚の共有は、多かれ少なかれすべての型のことば遊びに当てはまるものではあるだろう。ただ、現実的なコミュニケーション・ツールとしてのアクロスティックのように“秘密性”が高い場合や、次節を見る「ゲーム型」のようにルールの遵守自体が遊びになる場合において、〈交話的機能〉の強度も相対的に高くなると言うことができるようと思われる。

15 はんざわによれば、「アナグラム俳句」とは氏が授業実践の一つとして考案したもので、その方法は次のようなものである(はんざわ, 2000: 69)。「まず、ある季語を元の語とし、初五に据える。次に、その季語をさまざまにアナグラムして、その中から適当な二種の語句を選び出し、それぞれ中七と末五に配する。中七には二字足りないので、その分を適宜、補う。」

16 もちろん、この投書を一つの“作品”として見たときの面白さは、同じアナグラム的操作によって作られたペンネーム「なまけもののなかま」を抜きにしては語れない。

17 西山, 1999: 21-22。この点は、Grice(1975)ではやや曖昧さの残る書き方がされていたところで、グライスは、Grice(1989)の「回顧的あとがき」の中で、立論に修正が必要な点として、会話における合理性が関わる側面だけに限定しなければならないという主旨のことを述べている。

18 グライスは次のように述べる(Grice, 1975: 49; 邦訳: 44)。「話し手が現に言った通りの事柄を言うということと、話し手が全般的な協調の原理を遵守しているという仮定とが、どのようにして調和しうるのか。このような状況が、会話の含みを生じさせる状況の典型である。」

19 ベイトソン(1990 [2000])の訳注の中で、訳者の佐藤は「遊びのフレームのうち、人間のコミュニケーションに現われる、かなり高度なフレームに『なあんちやってのフレーム』とも呼ぶべきものがある」と指摘している(278)。

20 「なあんちやって」を付加しにくいことば遊びとしては、技巧型の「回文」やゲーム型の「しりとり」などがある。その原因として考えられるのは、前者については、回文を作るという前提が予め与えられていない限り、(回文が長いものになればなるほど)それがことば遊びであるということ自体が受け手にとって気づきにくいことであり、後者については、それがそもそも純粹なゲームとしてしか成立しようがないことである。

引用文献

- 有馬 道子 (1986) 『記号の呪縛 テクストの解釈と分裂病』 勁草書房
- Bateson, Gregory (1972 [2000]) *Steps to an Ecology of Mind*. The University of Chicago Press.
邦訳： グレゴリー・ベイツン（佐藤良明訳）(1990 [2000]) 『精神の生態学』 新思素社
- Grice, Paul (1975) Logic and Conversation. In Cole, P. and Morgan, J. (eds.) *Syntax and Semantics, vol.3 : Speech Acts*. Academic Press. (= Ch.2 of Grice (1989))
- Grice, Paul (1989) *Studies in the Way of Words*. Harvard UP.
邦訳：ポール・グライス（清塚邦彦訳）(1998) 『論理と会話』 勁草書房
- 波多野 和夫 (1991) 『重症失語の症状学——ジャルゴンとその周辺——』 金芳堂
- はんざわ かんいち (2000) 「『アナグラム俳句』は『愚な愛句はらむ』」『言語』2000年2月号（第29卷2号）68-73, 大修館書店
- 井上 宏 (2000) 「大阪の笑いの秘訣」『言語』2000年1月号（第29卷1号）54-57, 大修館書店
- Jackson, John Hughlings (1878-80) On Affections of Speech from Disease of the Brain. In J.Taylor (ed.) (1958) *Selected Writings of John Hughlings Jackson, vol.2.* 155-204. Basic Books.
- Jakobson, Roman (1960) Linguistics and Poetics. In Roman Jakobson (1966) *Selected Writings III.* 18-51. Mouton.
邦訳：ヤーコブソン (川本茂雄監修) (1973) 「言語学と詩学」『一般言語学』183-221, みすず書房
- ヤーコブソン, ロマーン (伊藤晃訳) (1983) 『詩学から言語学へ ——妻ポモルスカとの対話——』 国文社
- Jakobson, Roman, & Waugh, Linda (1979) *The Sound Shape of Language*. Indiana UP.
邦訳： ヤーコブソン, ウォー (松本克己訳) (1986) 『言語音形論』 岩波書店
- 亀山 恵 (1999) 「談話分析：整合性と結束性」, 田窪他『岩波講座言語の科学7 談話と文脈』93-121, 岩波書店
- 小谷野 敦 (2000) 「駄洒落文化は廃れゆくのか」『言語』2000年2月号（第29卷2号）38-43, 大修館書店
- 桑原 茂夫 (1982) 『不思議の部屋1 ことば遊び百科』 筑摩書房
- ルリヤ (1982) 『言語と意識』 金子書房
- 松澤 和光, 堀 浩一, 金杉 友子, 阿部 明典 (2000) 「ことば工学入門」『人工知能学会誌』15卷3号, 446-455, 人工知能学会
- 宮本 忠雄 (1994) 『言語と妄想 危機意識の病理』 (平凡社ライブラリー) 平凡社
- 西山 佑司 (1999) 「語用論の基礎概念」, 田窪他『岩波講座言語の科学7 談話と文脈』1-54, 岩波書店
- 鈴木 楢三 (1981) 『新版ことば遊び辞典』 東京堂出版
- 滝浦 真人 (1992a) 「《シニフィアンの暴走》をめぐって ——失語症と言語機能についての覚え書——」『*Imago*』1992年1月号（第3卷第1号）46-58, 青土社
- 滝浦 真人 (1992b) 「ことばが感情を表すとき —感情の表出と言語の人称的構造について—」『*Imago*』1992年4月号（第3卷第4号）226-233, 青土社
- 滝浦 真人 (2000a) 「ことば遊び論 ——伝えないコミュニケーションは何を伝えるか——」『言語』2000年2月号（第29卷2号）20-27, 大修館書店
- 滝浦 真人 (2000b) 『お喋りなことば』 小学館

- 谷川 俊太郎 (1983) 「立ちばなし——詩を書き始める時」『現代の詩人 9 谷川俊太郎』205-211, 中央公論社
- 歌田 明弘 (2000) 「だじやれの情報工学」『月刊百科』2000年8月号, 13-18, 平凡社
- ウォー, リンダ (1995) 「詩的機能と言語の性質」, ロマン・ヤコブソン (浅川順子訳) 『言語芸術・言語記号・言語の時間』(叢書・ユニベルシタス477) 245-283, 法政大学出版局
- 山中 桂一 (1989) 『ヤコブソンの言語科学 I 詩とことば』勁草書房

資料

[資料1] 「語新作ジャルゴン失語」患者の発話 (波多野, 1991: 11)

(勝手にしゃべり続けて) スペタイス, スイエーは沢山なかった, タイスなんかタイス, タイスはタイススケナカなかった, タイスケなんか, タイスケなんかない, タイスケタイスク, タイスクなんかない, タイスケがあるでしょう, みんなのってるスワンあるでしょう, みんなこういうあかいのが, あの若い人が悪いでしょう, もっとチッタオーアイシノ, オー, 小さいの入れて, 送つ, 取って, 拾って, 小さい大きいア小さいの, 小さいすえの置いて, 大きなの置いて見せて, 大きの小さいのゆって, それより大きくて, そんなのイワ, トワズにオカツねみんなオカツイの, ノカしているのを, スコッチをすえて何というのあんたら何ていうの, 何ていうの, 何ていうの, 何ていう, 小さい大きいのイワ何ていうの, 小さいの, いうかっての, イワクっての

• 音韻性変復パターン: 「語新作が少しづつ形を変えてあたかも韻をふんでいるかのように繰り返し出現する現象」(同上書, 59)

スペタイス/スイエー/タイス/タイス/タイス/タイススケナカ/タイスケタイスク/タイスケタイスク/タイスク/タイスケ
アカイ/ワカイ

• 意味性変復パターン: 「意味的に同一の範疇に属する語や, 意味上近縁な語群が, 次々と変化しつつ反復出現する現象」(同上書, 60)

入れて/送つ/取って/拾って/置いて/置いて見せて

小さいの/小さい大きい/小さいの/小さいすえの/大きなの/大き小さい/大きくて/小さい
大きいの/小さいの

[資料2] ロシアの神秘教団フルイスト派 (Khlysty) のグロソラリアにおける特徴的な音連続の例 (Jakobson & Waugh, 1979: 212; 邦訳: 224 参照)

Kindra fendra kiraveca (目まいしながら唱える文句)

Rentre fente (ある呪文の冒頭の文句)

natrufuntru ('祈る前に, 人よ, 恐れなさい')

[資料3] 精神分裂病者のジャルゴン的発話の例 (有馬, 1986: 150-151)

みさゝぎと, はなたちはなどを考えて, 驚かないんですが, 連れてこられたんです。結局, 中指が標準型をでないんです。流れなんです。七夕という神が一番えらいと思っていたら, 紅白っておめでたいとおもっていたら, 黒白が駄目なんです。死ぬわけなんです。昨夜も死にたくなって…お風呂にいったらとびあがって, でてきたんです。浮いちゃったんです。それで持ちあげたら, 結局うず巻で成田さんなんかにたよらないと, 輸出・輸入ができるないとおもうんです。いつごろかアメを一ついたゞいて笑っちゃったんです。あとの祭りなんです…だから勢力の分配になります。

ねないんです。胃がきまっちゃったらしいので、結核の第三期までなって、いまでも水泡がたつんです。池のコイがよってきてフをたべているのです。波がたってるんですよ…

〔資料4〕井上陽水「アジアの純真」(部分) (井上陽水/奥田民生『ショッピング』1997年)

北京 ベルリン ダブリン リベリア
東になって輪になって
イラン アフガン 聴かせてバラライカ

美人 アリラン ガムラン ラザニア
マウスだってキーになって
気分 イレブン アクセス試そうか

開けドアー
今はもう
流れでたらアジア

白のパンダをどれでも全部並べて
ピュアなハートが夜空で弾け飛びそうに
輝いている
火花のように

〔資料5〕谷川俊太郎のことばあそびうた (『ことばあそびうた』福音館書店, 1973年)

「ばか」
はかかった
ばかはかかった
たかかった

はがかけた
ばかはがかけた
がったがた

はかかんだ
ばかはかかんだ
かたかった

はかなんで
ばかはかなくなった
なんまいだ

〔資料6〕洒落類

(1) むだ口

驚き桃の木山椒の木 (鈴木, 1981:747)
恐れ入谷の鬼子母神 (鈴木, 1981:745)
呆れ蛙の頬冠り (鈴木, 1981:730)
腕が折れてシマウマ

(2) 駄洒落

テレビを買ってもう少しまけてもらいたい客:「そのテレビの台もつけといてえな」
店員:「そんなことしたら台無しでんがな」(井上, 2000:56-57)

(3) 地口

方々にも筆の誤り [鯵々にも歩鯢の誤] (<弘法にも筆の誤り) (鈴木, 1981:629)
ぜいたくは素敵だ (<ぜいたくは敵だ)
腐ってもタイソン (<腐っても鯢) (歌田, 2000:17)
当たり前だの倉本聰 (<あたり前田のクラッカー) (歌田, 2000:17)
石橋をたたいて渡哲也 (<石橋をたたいて渡る) (歌田, 2000:13)

〔資料7〕回文、アナグラム、アクロスティック

(1) アクロスティック

あくびがでるわいやけがさすわしにたいくらいてんでたいくつまぬけなあなたすべてころべ
(谷川俊太郎 [桑原, 1982: 4-5])

cf. あなたとわたし／いつでもいっしょ／しぬまできっと／てとてをつなぎ／まいにちふたり／す
てきなひびを (上との対照用に筆者が作ったもの)

二重アクロスティック (沓冠) (桑原, 1982: 32-35)

吉田兼好から頗阿への歌

夜もすずし／寝ざめのかりほ／手枕も／真袖の秋に／へだてなき風
(頭音「よねたまへ (米給へ)」, 尾音「ぜにもほし (錢も欲し)」)

頗阿から兼好への返歌

夜も憂し／ねたくわが夫 [せこ] /はては来ず／なほざりにだに／しばし訪ひませ
(頭音「よねはなし (米は無し)」, 尾音「せにすこし (錢少し)」)

(2) アナグラム、回文

アナグラム俳句 (はんざわ, 2000: 71-72)

里祭 妻去り独り 悟り待つ

親鸞忌 あら、きん死んだ ぎん知らん

蕪汁 ジブルタルタルか ブラジルか

回文

留守守る日若夫婦かは昼もする [るすもるひわかふうふかわひるもする]
(『しけり柳』 [鈴木, 1981: 893])

企まざるアナグラム (朝日新聞日曜版 [2000.5.21] 「いわせてもらお」)

「オットセイ」

小学三年の娘が国語辞典をひいていた。「オットセイってアシカの怠け者なんだって」。いくら
なんでも、と思い、見てみると「あしかのなかまのけもの」とあった。

(広島県福山市・なまけもののなかま・39歳)

(投稿受理日: 2001年9月26日)

滝浦 真人 (たきうら まさと)

共立女子短期大学文科

101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-27

takiura@nifty.com

What does wordplay communicate?: An interpretation via Jakobson's 'poetic function' and Grice's conversation theory

TAKIURA Masato
Kyoritsu Women's Junior College

Keywords

'poetic function', context, conversational 'maxims', rhetoric, 'metalingual function'

Abstract

In this paper, I discuss the communicative function of wordplay by way of Jakobson's 'poetic function' of language and Grice's conversation theory.

The 'poetic function' can be seen as a kind of automatous 'generator' of words, which projects onto the syntagmatic axis, phonological and/or semantic associates from the words on the paradigmatic axis. There is no difference between 'poetic language' and 'pathological language,' insofar as they are both generated by the same language function. Jakobson argued about the similarities between them, but as to the differences, he didn't.

What distinguishes the two kinds of language seems to lie in the quality of the verbal context, and the problems of context quality show up most prominently in wordplay. When seen from Gricean point of view, wordplay turns out to be a GENUINE deviation from his 'Cooperative Principle' and the 'maxims' under it, in that it is not just APPARENT deviation which give rise to 'conversational implicature.' Wordplay, therefore, cannot be interpreted in terms of 'conversational implicature' nor as an example of 'rhetoric,' such as irony or metaphor; there is a sense in which it is a NON-COMMUNICATIVE way of communication. It causes words to deviate from the context present in many different ways. This, in turn, has the effect of focusing on the context itself and impresses it on the addressee more strongly than usual. In conclusion, wordplay must be seen as a phenomenon which embodies not only Jakobson's 'poetic function' but also his 'metalingual function' of language.